山口大学教育学部研究論叢　第 70 巻　27 頁～ 33 頁　2021 年 1 月

視線に関する不快感情に及ぼす ポジティブおよびネガティブな性格特性

山内　裕斗 *・田邊　敏明

Positive and Negative Characteristics on Discomfort Feeling to Another's Gaze

YAMAUCHI Hiroto*, TANABE Toshiaki

（Received September 25, 2020）

問題

視線は、状況によって親愛と敵意というポジティブな面とネガティブな面をもつ（小俣，1992）。相手と話したい、親しくなりたい、という親和動機によって相手に視線を送ることもあれば、空気を読む、周りを見てそれに合わせて動く、などの社会的参照や情報収集の機能、また、共同注意に代表されるように対象への注意を促す役割もある。さらに、怒りを覚えたときや相手を威嚇、威圧するとき、相手よりも自分の方が強いと思わせるときなども視線によって相手を見るだろう。視線は脅威刺激にもなり得、社交不安傾向がある者は他者の視線を脅威と感じ、アイコンタクトを回避する傾向にあることも分かっている（石川・岡村・大久保，2012）。

人間は、人の姿を積極的に見ようとする傾向があり、周りのことを知りたいという欲求を持っている（山口，2009）。周りのことを知ろうとすることは、何か新しい発見を得ることができるという点でも、自分や周りに起きそうな危険を素早く察知するという点においても有効に働く。林（2012）は、脳には“知りたい”という本能が備わっていると述べているが、自分の利益になることを得たり、不利益になることを避けたりするために、積極的に周りの人を見ようとし、“知りたい”という本能が備わっているのだろう。しかしながら、視線にはポジティブな面とネガティブな面がある。周りの状況や他者に対して視線を向けることで、他者と目が合うとポジティブ面でのアイコンタクトのように、感情面で自分の得になる“快”感情を抱くときもあれば、ネガティブ面での威圧感や鋭さを感じる視線など、できるだけ感じたくはない“不快”な感情を抱くこともあるのではないか。後者のような、視線に焦点を当てた不快感情として、山内・小野（2019）は、視線に関して不快感情を感じる場面や状況を整理し、「不安・恐怖」「イライラ」の 2 因子から成る、視線に関する不快感情尺度を作成している。

ここで、“周りを見る”という行為には、身の周りの情報を収集しようとしていると同時に、外に向けて興味や関心があり、新奇性や発見などを求める好奇心や、他者と話したい、親しくなりたい、という親和性、他者や周りにいる人の気持ちを汲み取る感受性などのポジティブな側面が働いているとみることもできる。しかしながら、よく周りを見る人の中には、周りを確認していないと落ち着かない、周りの人が自分のことをどのように見ているのかを知りたい、周りにはどのような人がいるのか把握したい、という人も一定数存在し、そのような人達は周囲をよく見るのだが、ポジティブな面というよりは、疑いや不信、というネガティブな側面の方が強いのではないか。つまり、周りに視線を向けるという行為には、ポジティブな面とネガティブな面があり、どちらの傾向が強いか、ということは人によって程度が異なると考えられる。さらに、他者から見られることで不快に感じるのは、見られるのであれば出来の良い自分、より良い自分を見せたいが、その準備ができていないからだ、という完全主義的な解釈もできるだろう。併せて、他者から見られることで喚起される感情は、個人の性格特性も関与していることが考えられる。山内・小野（2019）は、視線に関する不快感情尺度の「不安・恐怖」因子においては社交不安との関連を示唆しており、社交不安は神経症傾向との関連が認められている（Norton，Cox，Hewitt & McLeod，1997）。また、西川・雨宮（2015）は、知的好奇心と開放性において正の相関を確認している。このような性格特性の影響も、“周りを見る”という行為には外すことができない要因であろう。

＊ 令和元年度山口大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース心理学選修卒業生

そこで本研究では、目的を以下の２点とする。
①他者から見られることで喚起される不快感情に対して、好奇心や親和性、感受性などのポジティブな特性、疑い深さや完全主義の認知などのネガティブな特性、また、５因子の性格特性の影響力を調べる。
②他者の視線により不快感情を抱くのは、その人が周りを見ているからであるという前提を確認する。

方法

調査手続き

大学の講義の時間内で、大学生を対象に質問紙調査を行った。回答は任意であり、得られたデータから個人が特定されることはない、という教示を行い、倫理的配慮を行った。調査協力者140名のうち、すべての項目に回答している者133名（男性74名，女性59名，平均年齢19歳）を分析の対象とした。用いた尺度は以下のとおりである。

使用尺度

・視線に関する不快感情尺度（山内・小野，2019）
「不安・恐怖」因子６項目と「イライラ」因子６項目の計12項目の２因子構造で構成されている。山内・小野（2019）に基づき、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の５件法で回答を求めた。

・知的好奇心尺度（西川・雨宮，2015）
「拡散的好奇心」因子６項目と「特殊的好奇心」因子６項目の計12項目の２因子構造で構成されている。西川・雨宮（2015）に基づき、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の５件法で回答を求めた。

・日本語版Generalized Communicative Suspicion Scale（GCS）（滝口，2017）
「信頼への態度」因子３項目と「他者一般の不信に関する信念」因子６項目の計９項目の２因子構造で構成されている。３名の協力者のもとで行った予備調査により、３名すべての協力者が「１つの項目は文意が分かりにくい」という指摘を行ったため、本調査では調査協力者の負担を減らすためにその項目は削除した。削除した項目は「他者一般の不信に関する信念」因子の項目であり、本調査では２因子計８項目で行った。滝口（2017）に基づき、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の５件法で回答を求めた。

・大学生における日常生活スキル尺度（島本・石井，2006）個人的スキル４因子（計画性，情報要約力，自尊心，前向きな思考）と対人スキル４因子（親和性，リーダーシップ，感受性，対人マナー）の８因子、各３項目の計24項目で構成されている。本調査ではこの中から「親和性」因子３項目と「感受性」因子３項目を採用し、調査を行った。島本・石井（2006）に基づき、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」の４件法で回答を求めた。

・完全主義の認知を多次元で測定する尺度（小堀・丹野，2004）
「高目標設置」因子５項目、「完全性追求」因子５項目、「ミスへのとらわれ」因子５項目の計15項目３因子構造で構成されている。本調査では、各因子の因子負荷の高い上位３項目ずつを採用し、計９項目で調査を行った。小堀・丹野（2004）に基づき、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」の４件法で回答を求めた。

・日本語版TIPI-J（小塩・阿部・カトローニ，2012）
「外向性」「協調性」「勤勉性」「神経症傾向」「開放性」の５因子、各２項目の計10項目で構成されている。小塩・阿部・カトローニ（2012）に基づき、「強くそう思う」から「全く違うと思う」の７件法で回答を求めた。

・普段から周りの様子や周りの人を見ているかを確認するため、「普段から周りの様子を見ていると思う」「普段、周りの人をよく見ていると思う」「人とよく目が合うと思う」という３項目を採用し、「強くそう思う」から「全く違うと思う」の７件法で回答を求めた。

結果

分析１

質問の中の逆転項目は逆転処理を行った後に、分析ソフトＲ（バージョン3.4.2）を用いて分析を行った。説明変数として知的好奇心の「拡散的好奇心」「特殊的好奇心」、日本語版GCSの「信頼への態度」「他者一般の不信に関する信念」、大学生における日常生活スキルの「親和性」「感受性」、完全主義の認知の「高目標設置」「完全性追求」「ミスへのとらわれ」、性格特性の「外向性」「協調性」「勤勉性」「神経症傾向」「開放性」、目的変数として視線に関する不快感情の「不安・恐怖」、「イライラ」を設定して重回帰分析を行った（Table1）。その結果、目的変数が「不安・恐怖」のときに「親和性」($\beta=-0.507$, $p<.05$)「高目標設置」($\beta=-0.569$, $p<.01$)が有意な負の偏回帰係数、「ミスへのとらわれ」($\beta=0.401$, $p<.05$)「神経症傾向」($\beta=0.378$, $p<.05$)「開放性」($\beta=0.306$, $p<.05$) が有意な正の偏回帰係数を示した。目的変数が「イライラ」のときには、「感受性」($\beta=0.529$, $p<.05$) が有意な正の偏回帰係数、「協調性」($\beta=-0.459$, $p<.01$) が有意な負の偏回帰係数を示した。VIF値はいずれの説明変数においても3.0以下であり、多重共線性に問題は見られなかった。

Table1　目的変数を「不安・恐怖」「イライラ」としたときの重回帰分析の結果

	不安・恐怖	イライラ
拡散的好奇心	-0.025	0.093
特殊的好奇心	0.011	-0.016
信頼への態度	0.181	-0.093
他者一般の不信に関する信念	0.012	-0.126
親和性	-0.507*	-0.224
感受性	0.302	0.529*
高目標設置	-0.569**	0.127
完全性追求	-0.041	0.131
ミスへのとらわれ	0.401*	0.051
外向性	-0.199	-0.131
協調性	-0.206	-0.459**
勤勉性	0.050	-0.172
神経症傾向	0.378*	0.185
開放性	0.306*	0.080
R^2	0.372	0.187
abj R^2	0.297	0.090
*F*値	4.988	1.934

$^*p<0.05$　$^{**}p<0.01$

分析２

視線に関する不快感情と周りを見ている程度を調べるため、視線に関する不快感情尺度の「不安・恐怖」「イライラ」と、普段から周りの様子や周りの人を見ているかを確認するために追加した項目「普段から周りの様子を見ていると思う」、「普段、周りの人をよく見ていると思う」、「人とよく目が合うと思う」の３つの項目について相関分析を行った（Table 2）。いずれも有意ではなく、相関もほとんど見られなかった。

Table2　相関分析の結果

	不安・恐怖	イライラ
普段から周りの様子を見ていると思う	-0.006	0.003
普段，周りの人をよく見ていると思う	-0.154	-0.070
人とよく目が合うと思う	-0.119	0.114

分析３

説明変数として、知的好奇心の「拡散的好奇心」「特殊的好奇心」、日本語版GCSの「信頼への態度」「他者一般の不信に関する信念」、大学生における日常生活スキルの「親和性」「感受性」、完全主義の認知の「高目標設置」「完全性追求」「ミスへのとらわれ」、性格特性の「外向性」「協調性」「勤勉性」「神経症傾向」「開放性」、目的変数として、上記の普段から周りの様子や周りの人を見ているかを確認するために追加した項目（普段から周りの様子を見ている、周りの人を見ている、人とよく目が合う）を設定して重回帰分析を行った（Table 3）。その結果、目的変数が「普段から周りの様子を見ていると思う」のときに、「特殊的好奇心」（β=0.081, p<.05）「親和性」（β=0.176, p<.05）「感受性」（β=0.171, p<.05）「ミスへのとらわれ」（β=0.144, p<.05）「協調性」（β=0.141, p<.01）が有意な正の偏回帰係数、目的変数が「普段、周りの人をよく見ていると思う」のときに、「親和性」（β=0.229, p<.05）が有意な正の偏回帰係数、「信頼への態度」（β=−0.113, p<.05）が有意な負の偏回帰係数、目的変数が「人とよく目が合うと思う」のときに、「拡散的好奇心」（β=0.101, p<.05）「完全性追求」（β=0.209, p<.01）「外向性」（β=0.120, p<.05）が有意な正の偏回帰係数を示した。VIF値はいずれの説明変数においても3.0以下であり、多重共線性に問題は見られなかった。

Table3　見る3項目における性格特性の重回帰分析の結果

	周囲を見る	人を見る	目が合う
拡散的好奇心	-0.029	-0.045	0.101*
特殊的好奇心	0.081*	0.067+	-0.009
信頼への態度	-0.099+	-0.113*	-0.015
他者一般の不信に関する信念	0.008	0.004	0.007
親和性	0.176*	0.229*	-0.057
感受性	0.171*	0.134	0.122
高目標設置	-0.096	-0.019	-0.025
完全性追求	0.033	-0.015	0.209**
ミスへのとらわれ	0.144*	0.140+	0.072
外向性	0.042	0.090+	0.120*
協調性	0.141**	0.098+	0.073
勤勉性	-0.007	0.005	0.041
神経症傾向	-0.074	-0.069	0.022
開放性	0.045	-0.025	-0.050
R^2	0.307	0.243	0.260
$abj\ R^2$	0.225	0.153	0.173
F値	3.737	2.708	2.968

$^{+}p<0.1$　$^{*}p<0.05$　$^{**}p<0.01$

考察

本研究での目的は、他者から見られることで喚起される不快感情に対して、好奇心や親和性、感受性などのポジティブな特性、疑い深さや完全主義の認知などのネガティブな特性の性格特性がいかに影響しているかを調べるとともに、他者の視線により不快感情を抱くのは、その人が周りを見ているからであるという見ることの本来の意味と比較検討することであった。

分析１より、視線に関する不快感情に影響を及ぼす性格特性の影響力の差として、「不安・恐怖」において、「ミスへのとらわれ」「神経症傾向」「開放性」が正の影響、「親和性」と「高目標設置」が負の影響を与えていた。その中でも開放性の項目は「変わった考え」や「発想力」など、本来の自分の考えというポジティブな特性に関する項目になっている。このような「他とは異なる奇抜な発想」は、他の人に受け入れてもらえるだろうか、分かってもらえるのだろうか、という懸念が、不安や恐怖につながるということも考えられる。つまり、他者の視線での不安や恐怖を感じる人は、本来ポジティブで推奨すべき特性である開放性の「変わった考えや発想」を持つゆえに、ただそれが受け入れられるかどうか不安で、神経質になり、ミスをするのではないかと心配して、目標も低く設定してしまい、自然と人への親和性も低くなっていくとも解釈される。ただ、ミスをするのではないかと心配して目標を低くするのは、他者に受けいれてもらおうとする自己の調整能力の現れともポジティブにも考えられる。

また、「不安・恐怖」は、性格特性の神経症傾向と高い正の影響が見られた点をさらに考察してみたい。Norton, et al.（1997）は、NEO-FFIを用い、社会恐怖と性格特性の関連として、神経症傾向と正の相関が見られたことを報告している。「不安・恐怖」因子は社交不安と関連があるとの示唆があるが（山内・小野，2019）、Schlenker & Leary（1982）は、相手に好印象を与えようとする動機が高まるほど、またその動機が高まる一方で好印象を与えることに失敗するのではないかという思いも強いほど社交不安が高まると述べており、本研究の「高目標設置」の低さと「ミスへのとらわれ」の高さとの関係からも、「不安・恐怖」因子と社交不安の関連を解釈することができる。それは自分の開放性、つまり奇抜な発想を受けいれてもらえるだろうかという不安を原点としていると考えられるが、その不安を低減するためにもミスや失敗をしないように、目標も低く設定してうまく調整しているのであろう。

以上、「不安・恐怖」因子についてまとめると、開放性の高さ、ミスへのとらわれの高さ、神経症傾向の高さ、親和性の低さ、高目標設置の低さとの関連から、まず、開放性の高さからの影響を受けており、発想力や想像力などを持っているが、その発想や想像があるがために、受け入れてもらえるかどうかという不安や恐怖につ

ながるということが考えられる。さらに対人恐怖心性の側面からの影響として、ミスにとらわれやすく、目標を設定する際には自分の能力を分かったうえで適切な目標を立てているという可能性が考えられる。ミスをするのではないかと心配して目標を低くするのは、他者に受け入れてもらおうとする自己の調整能力の現れとしてポジティブにも考えられる。

「イライラ」因子には、「感受性」が正の影響、「協調性」が負の影響を与えていた。山内・小野（2019）は、視線に関する不快感情における、「イライラ」因子について、男性より女性の方が不快感情得点が有意に高く、イライラを感じやすかったと報告している。茂木（2014）によると、女性は男性よりも共感能力が高く、人間関係をより大事にする。高橋（2014）も、男性よりも女性の方がコミュニケーションを好むと述べており、男女問わず、コミュニケーションをとり、人と接する中で感情が揺れ動くこと、感情の変化が起こることが想定される。本研究では男女差を比較検討してはいないが、他者の視線に対して「イライラ」を感じやすい人は人間関係で相手に期待する水準が高く、しかし実際にはその期待を満たすことができないためにイライラを感じるということが考えられる。そしてその背後には、相手の身になって考えるようなポジティブな特性である共感能力が高いことが推測され、それに伴い相手に対する感受性が高くなったと考えられる。また、協調性について、藤井（2009）は、イライラしやすい人は、ものごとを自分の思い通りにしたい、コントロールしたいという気持ちが強いと述べており、佐藤・佐々木・杉本（1992）によると、いらいらは自分の思い通りにならないときに発生する。そのため、協調性が低く、自分本位で考えてしまう人は、イライラが生じやすいということが言える。

以上、「イライラ」因子についてまとめると、感受性の高さや協調性の低さが影響を与えており、その下には共感能力が高く、それゆえ相手に対して感受性が高いものの、一方で人間関係においては相手に対する期待水準が高く、自分本位な面があり、協調性が低くなるという特徴があると考えられる。

次に分析２より、「普段から周りの様子を見ていると思う」「普段、周りの人をよく見ていると思う」「人とよく目が合うと思う」という３つの項目について、Table2から、視線に関する不快感情とこれら３つの項目の関連は見られなかったものの、分析３のTable3より、３つの項目に影響を及ぼす特性が明らかになった。まず、「普段から周りの様子を見ている」という項目について、特に大きな影響として「親和性」「感受性」「ミスへのとらわれ」「協調性」で説明できる結果となった。親和性と感受性で影響が見られたことより、このような特徴をもつ人は、周りの人や状況に関心があり、他者や身の周りのことにおいて気を遣うことができる人であると推測できる。協調性の影響からも、協調性が高い人は、周り全体や集団のつながりを重視し、その場にふさわしい行動をとることができる人であると考えられる。加えて、ミスや失敗をしたくないという気持ちも存在するのは、周りを見ているがために、その状況において、協調的にその場に合った自分の振る舞いに気をつけるゆえにミスや失敗をしないようにする意識が高いのであろう。

ここで、分析１で得られた視線における不安や恐怖と性格特性の関係の結果と比較すると、親和性と協調性で逆の結果が出たのは、純粋に周りの様子を見ているという行動は、不安とか恐怖というより、ミスをしないように周囲を観察する行動であり、それは周囲に親和性をもち周囲と協調しようとする意識から生まれてくるものであるからであろう。

次に、「普段、周りの人をよく見ている」という項目について、「信頼への態度」が負の影響、「親和性」が正の影響を与えていた。この結果から、周りの人をよく見ている人は、人に親しみがあり接近する一方で、完全に相手を信頼することはなく、信頼しないからこそ相手や周りの人をよく見ているということが予想される。この結果は、分析１の結果とは、親和性の結果が逆であり、純粋に周りの人を見ているという行動は、親和性に基づく行動であるが、信頼の面で警戒しており、視線における不安や恐怖までは生起しないが、接近したいが全面的に信頼はせずという周囲に対して自分を調整している感じが伺える。

「人とよく目が合う」という項目については、「拡散的好奇心」「完全性追求」「外向性」においての影響が見られた。完全性追求の面から、「自分はこれで間違っていないはずだ」という確認や同意を得るために、他者の目を見て同意を求めているのだと考えられる。また、拡散的好奇心や外向性の面からは、周りにいる他者に対して関心を向けるという他者志向性が推測される。この結果は、分析１の不安や恐怖、イライラにも見られない結果が出ているが、純粋に周囲に対して確認や同意を得たいという欲求に従って積極的に振る舞った行動結果を指しているのであろう。

本研究では、視線に関する不快感情や、周りの様子や人を見るという行為について、影響を及ぼす特性が明らかになった。米倉（2012）は、対人恐怖と社交恐怖による対人関係からひきこもりが認められた事例を紹介し、青年期のひきこもりを示すタイプの、精神疾患および気分障害の事例群の中に、対人恐怖や社交不安を位置付けている。土屋（2007）は、大学生においてひきこもり傾向が高い人は自己・他者意識が全般的に高いことを示

唆している。このように、他者の存在や視線を意識することで、過度の不安や恐怖などの不快感情を抱き続けると、社交場面に出ることができなくなり、ひきこもりになってしまうことも考えられる。ひきこもりは一般的にはネガティブと捉えられがちだが、一方でそのような人の中にも開放性を高く示し、発想力や想像力などを発揮する人や感受性が強い人など、目には見えにくいがポジティブな面も併せ持っている可能性があるということを認識しておくと、ひきこもりや対人恐怖、社交不安などに対して異なる視点からの解釈が可能になる。

近年は、HSP（Highly sensitive person）という、敏感で情緒伝播の高い性格特性が注目されており、このHSPは過度に敏感とネガティブに捉えるのではなく、他者に対して感受性豊かに対応しているとポジティブに捉え直されている（串崎，2020）。岐部・平野（2019）は、HSPの特徴である感受性と開放感に触れ、美的感受性が強いことに加えて、その美的感受性と新しいことが好きで変わった考え方を持つ開放性との間に弱い相関が見られたと報告している。本研究では、視線の不安・恐怖因子とイライラ因子との間に、それぞれ関連の見られた開放性と感受性はポジティブな特性であり、視線にまつわる因子もHSPの特性と同様にポジティブな要素を含んでいることがわかる。一方で、HSPにおいて共感性や情動伝播が過度に強いことは不登校にも関連しているとされており、過度になることは注意を要する。それゆえ、他者の存在や視線に向く意識が過剰にならないような、つまり、持ち合わせている感受性が、協調性が低くなるほどのひとりよがりにならないように心がけたい。単に周囲の人や様子を見ることは、他者に対して親和的で協調的な行動といえるが、一方で視線において不安や恐怖が現れる程に高まると、自分を受け入れてもらえるかどうかという対人不安が高まり、その際にミスをしないように目標を低く設定するような自己調整も必要となる。従って、周囲に関心は持ちつつも、開放性や感受性は適度に保っておくことが人格の適応においては必要であろう。

本研究での視線の因子と開放性と感受性との関連が見られたように、HSPにおける視線も、自分の奇抜な考えを発揮する上で、外界からの情報を感受性豊かに受け取り、ミスをしないように、また目標を低く設定するようにするなど、自己を調整する機能を果たしているかも知れない。今後HSPのような性格特性が、視線の因子とどのような関連があるかを詳しく見ていく必要があろう。

引用文献

藤井雅子（2009）．人はなぜ怒るのか　幻冬舎新書

林成之（2012）．解決する脳の力　角川新書

石川健太・岡村陽子・大久保街亜（2012）．社会不安傾向者の視線方向判断―表情と解釈バイアス―　心理学研究 83（3），225-231.

岐部智恵子・平野真理（2019）．日本語版青年前期用敏感尺度（HSCS-A）の作成　パーソナリティ研究 28，108-118.

小堀修・丹野義彦（2004）．完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み　パーソナリティ研究 13，1，34-43.

串崎真志（2020）．繊細な心の科学－HSP入門　風間書房

茂木健一郎（2014）．男脳と女脳 人間関係がうまくいく脳の活用術．総合法令出版

西川一二・雨宮俊彦（2015）．知的好奇心尺度の作成―拡散的好奇心と特殊的好奇心―　教育心理学研究 63，412-425.

Norton，G．R.，Cox，B．J.，Hewitt，P．L.，& Mcleod，L.（1997）．Personality factors associated with generalized and nongeneralized social anxiety. *Personality and Individual Differences*，22，655–660.

小俣謙二（1992）．日本人学生の座席選択にみられる特徴．名古屋文理短期大学紀要 17.

小塩真司・阿部晋吾・カトローニ　ピノ（2012）．日本語版Ten Item Personality Inventory（TIPI-J）作成の試み　パーソナリティ研究 21，1，40-52.

佐藤陽彦・佐々木司・杉本洋介（1992）．“いらいら”の構造　人間工学 28，4，223-229.

Schlenker，B．R.，& Leary，M．R.（1982）．Social anxiety and self-presentation:A conceptualization model. *Psychological Bulletin*，92，641-669.

島本好平・石井源信（2006）．大学生における日常生活スキル尺度の開発　教育心理学研究　54，211-221.

高橋暁子（2014）．ソーシャルメディア中毒　つながりに溺れる人たち　幻冬舎エデュケーション新書

滝口雄太（2017）．日本語版GCS尺度の作成の試み．東洋大学大学院紀要．54，77-89.

土屋美樹（2007）．大学生のひきこもり心性と自己・他者意識および欲求不満耐性との関連　人間科学研究　20，60-60.

山口真美（2009）．センスのいい脳　新潮新書

山内裕斗・小野史典（2019）．視線に関する不快感情尺度の作成，及びメタ認知との関連　ストレス科学研究　34，65-71.

米倉五郎（2012）．ひきこもる青年期事例の心理査定と心理療法―アスペルガー障害を心配した対人恐怖

の二事例―　愛知淑徳大学論集―心理学部篇―　2,
93-105.